



エレクション(黒社会/ELECTION)

2007(平成19)年1月25日鑑賞(東映試写室)

監督=杜琪峰 / 出演=任達華 / 梁家輝 / 古天樂 / 張家輝 / 張兆輝 / 林雪 / 林家棟 / 王天林 / 譚炳文 / 邵美琪 / 姜大衛 (東京テアトル、ツイン配給 / 2005年香港映画 / 101分)

……黒社会の会長選^{エレクション} 拳をテーマとした「香港ノワール」は、会長の個性がポイント。その点、2人の主人公は動と静で対照的だが共に合格点。しかし選挙のルールがイマイチ……? さらに、会長職のシンボルをめぐる争奪戦がややこしすぎて、ちょっとワケがわからん……? 自民党の総裁選挙は昨年9月に終わったが、今、大阪弁護士会は会長選挙の真っ只中。選挙は外から見物している分には面白いのだが……?

🎬 2匹目のどじょう狙いは……?

マーティン・スコセッシが監督し、レオナルド・ディカプリオとマット・デイモンが共演した話題作『ディパーテッド』(06年)は、言うまでもなく『インファナル・アフェア』3部作のハリウッドリメイク版。それほど『インファナル・アフェア』のインパクトが強かったわけだから、その影響が香港映画界に強く及んだのは当然。

黒い映画(Film noir)とは、アメリカの犯罪映画の中でも、『マルタの鷹』(41年)のように男女の欲望、陰謀、心理、不安に根ざしたものをいう(『映画検定 公式テキストブック』190頁参照)が、最近「香港ノワール」という言葉が定着しているほど、香港で黒社会を扱った秀作が増えている。杜琪峰は海外での評価が次第に高まっている監督で、『エレクション』も第58回カンヌ国際映画祭コンペ部門の正式出品作品として上映された。これは誰が見ても『インファナル・アフェア』の大ヒットを踏まえて、2匹目のどじょうを狙っていることは明らか……?

もちろん、そう言われるとジョニー・トー監督は心外で、あくまで自分独自の視点

で描いていると反論されそうだが、それはともかく、この『エレクション』は『インファナル・アフェア』に匹敵する成功を収めることができるだろうか……？ かつて東映は任侠路線・ヤクザ路線を大ヒットさせ、さまざまなシリーズをつくり出し、多くの俳優を生み出したが、それと同じように「香港ノワール」のヒットは、なおしばらく続くのだろうか……？

■ 返還後9年を経た香港は……？

香港は1997年7月1日中国へ返還されたが、急激な混乱を避けるため、従来からの「一国二制度」が維持された。しかし、その後の香港の中国本土化は著しく、次第に本土に呑み込まれていっていることは、香港の「民主化デモ」の規模が年々小さくなっていることから明らか……。さらに、それを経済的に明らかにしたのが、近時の香港ドルと中国人民元の交換レートの逆転現象。すなわち、1月11日付日経新聞(夕刊)は、中国人民元の香港ドルとの交換レートが2005年7月の切り上げ後初めて等価となったことを伝えた(ちなみに、この時点で、人民元は1ドル=7.79元台に突入したとのこと)。

これをさらにネットで詳しく調べると、①中国人民銀行(中央銀行)は1月11日、人民元と米ドルの外国為替取引で基準相場となる中値を、1米ドル=7.7977元に設定した。

②この時点での、香港ドルのペッグ制(連動相場制)レートは1米ドル=7.8HKドル。③したがって、この時点で人民元と香港ドルの価値が逆転した、ということだ。近年、中国の貿易黒字は膨らむばかりとなっていたため、2005年7月21日、人民元は対米ドル2.1%切り上げられたが、それ以降も人民元高傾向は一貫して続いており、ついに人民元と香港ドルの価値が逆転することになったわけだが、この傾向は今後もさらに続くことは明らか。したがって、当然円についても、中国人民元との交換において不利になってくること明らかだから、これから中国旅行に行く人は、早めに円を人民元に交換しておいた方がトク……？

政治的・経済的そして軍事的に、香港が中国本土と一体化していく流れは今後も一層進みそうだが、文化や映画の面においてもそれは同じ。今から約20年前、すなわちチェン・イーモウ チェン・カイコー 張藝謀や陳凱歌ら中国第5世代の監督が台頭した1980年代においては、中国映画と香港映画の違いは明白だったが、今はその融合化が顕著。返還9年を経た香港は、

そして香港映画は今後どのように変化していくのだろうか……？

開かれた組織？ それとも秘密結社？

マフィアはもちろん社会的に認知されていない非合法組織だが、長年の伝統として会長を2年ごとの選挙で選んでいるという構成員5万人を数える香港の最大のマフィア組織、^{ウオーリエンセン}和連勝会は、ある意味で開かれた組織……。だって、選挙という開かれた制度が成り立つためには、投票できる者の資格や選挙活動のあり方そして投票のやり方などをきちんと定める各種の法規が必要だから。ところが、その当然のルールがこの映画では全く見えてこないから、買収したり、恐喝したりなどの違法かつ不当な選挙活動が目についてしまう。仮に公職選挙法などが存在しない会長選挙であれば、その選挙はかなりインチキ……。さらに、映画の中盤、「あれっ」と思う9人の幹部による秘密結社めいた儀式が展開されるから、それにご注目！ 会長以下副会長などの役員（執行部）をどのように選ぶのかも全く明らかにされないことも、この映画の弱点（？）だが、幹部9名によるこの儀式を見ていると、やはりマフィアは所詮マフィア……？

会長候補は個性で勝負！

和連勝会の現会長^{チョイガイ}の後任の会長選挙に立候補したのは、まずは年長者を敬い、「兄弟」を大切にす物静かな実力者の^{サイモン・ヤム}ロク（任達華）。その対立候補は、荒っぼく切れやすい性分で武闘派ながら、金儲けにも長けている^{レオン・カーファイ}ディー（梁家輝）。こんな2人の選挙戦術は両極端。

まず、^{ウオン・ティンラム}ロクはタン幹部（王天林）の教えに従って、1人1人の幹部への説得活動に重点を……。これに対し、ディーは^{タム・ビンマン}ロング・ガンやチュン（譚炳文）へワイロ攻勢をかけたり、現会長の^{チョイガイ}に対して、和連勝会のシンボルである竜頭棍を渡すよう強引に迫るなど、やることが荒っぼい。したがって、それに忠実に従う者もいれば、反発する者も……？

他方、そんな会長選挙をめぐる混乱に乗じて、和連勝会の幹部の一斉取締りかけたのが、香港警察の^{デヴィッド・チャン}ホイ警視（姜大衛）。しかし、彼らは今、特別違法なことをしているわけではなく、あくまで会長選挙を闘っているだけだから、警察もメスを入れることは困難……。？

大阪弁護士会も会長選挙の真っ只中

この映画のプレスシートには、大下英治氏（作家）の『『黒社会』と『政界』の権力闘争』という解説があるが、これが面白い。彼は『修羅の群れ』『広島やくざ戦争』のようなヤクザの世界と、『実録 田中角栄と鉄の軍団』『郵政大乱！ 小泉魔術』のような政界の両者取材し、書き続けている作家だから、香港の黒社会の権力闘争を描いたこの映画に興味を持ったのは当然だが、さすがにその分析は鋭い。そんな彼もあまり知らないであろう「会長選挙」という権力闘争が、実は今大阪で展開されている。それは大阪弁護士会の会長選挙で、2月9日が投票日……。

「開かれた司法」を目指し、2009年からの裁判員制度の実施を間近に控えている司法界だが、弁護士会の内幕は一般国民にはあまり知らされていないし、司法界は政界や行政ほどマスコミがボロクソに批判する対象にはされていない。しかし、弁護士会も組織である以上、その中に派閥があるのが当然。もっとも、大阪弁護士会ではそれを派閥と言わず会派と呼んでいるが、要するに弁護士会をどのように運営していくべきかについての考え方の相違が、会派を生み出しているわけだ。

会長・副会長の任期は1年。1年だけでは何もできないのではないかと思われるだろうが、これは、任期を2年、3年にしてしまうと希望者になかなかそのポストが行きわたらないから、それを防止するための唯一の策……？ 各会派の調整(?)によって、毎年1人の会長と7名の副会長の割り当てが決まるのが通例だが、数年に1度その調整がつかないことがあり、そうなるこの『エレクション』のような会長選挙に突入することになる。今年の会長選挙は、春秋会の山田庸男氏と一水会の高坂敬三氏の闘い。私も当然投票しなければならないが、さてその結果は……？

竜頭棍の意味がもうひとつ……？

この映画では竜頭棍が大きなポイントになる。竜頭棍とは、和連勝会のボスであることを象徴するシンボルで、日本の天皇家に伝わる三種の神器のようなもの……？ シンボルはあくまでシンボルだから、それ自体に価値があるわけではなく、その曰く因縁が大切だが、この竜頭棍については観客にはその曰く因縁がよくわからない。したがって、その争奪戦に命をかける会長候補者やその配下のヤクザたちの気持がわからないのが大きな難点。もう少し丁寧な説明が必要なのでは……？

登場人物が多すぎて

ディーから竜頭棍を渡すように迫られた現会長のチョイガイが、それを拒否して竜頭棍を九龍から広州の地に隠したのが竜頭棍をめぐる争奪戦の第一歩。その任務をロク派のソー（張兆輝）とダイタウ（林雪）が担うが、それを襲ったのがボスと共にディー派になれと説得されたトンクン（林家棟）。しかしボスがロク派に寝返ったため、このトンクンはダイタウと和解。

他方、ディーの部下ながらロング・ガンの票をとれなかったため木箱に詰められてしまったサムの弟分がジミー（古天樂）だが、彼は一匹狼として竜頭棍争奪戦に参加し、最終的に彼がこれを手に入れることに……。そうするとジミーが竜頭棍をロクに渡すのかどうか最大のポイントになるが、さて、彼は……？

このように、竜頭棍の争奪戦をめぐるストーリーだけでも登場人物が多いうえ、それぞれがどんな立場でどんな役割を果たしているのかよくわからないため、ややこしいことおびただし限り。もう少し登場人物を絞って、ストーリーをすっきりとさせてほしいと思ったのは私だけ……？

『ゴッドファーザー』には、とてもとても……？

この映画のチラシには、「アジアの『ゴッドファーザー』……、最近の香港映画の中で最高の1本」また「ここに『ゴッドファーザー』『仁義なき戦い』の系譜を継ぐ、新たな傑作が誕生した」という宣伝文句がある。たしかに「力ではなく選挙に勝たなければNo.1になれない」「頂点を目指すことに取り憑かれた男たち」というテーマに焦点を当て、黒社会内部の権力闘争を興味深く描いていることは認めるものの、あの最高傑作『ゴッドファーザー』と並べるのは少し失礼というもの……。

もっとも、この映画のラスト近くには、やっと和解した（「談合」が成立した……？）ロクとディーの2人に思いがけないシーンが登場するからそれに注目。ちなみにこの映画には、女性はディー夫人の邵美琪1人しか登場しない。また子供もロクの息子1人しか登場しない。

今日は、会長選挙も終わり、9人の幹部の団結の儀式も終わり、心静かにロクとディーそしてディー夫人とロクの息子の4人で釣りを楽しんでいるシーン。ところがここでディーは「会長の二人制はどうだろうか」というとんでもない提案を……。それ

を静かに聞き「そうだな」と受け流していたロクだったが、その後、衝撃的なシーンが……。やはりどんな誓いを結んでも、またどんな儀式を挙げて、所詮人間の心は……？

『エレクション2』がミエミエ……？

ラストに注目しなければならない映画は多いが、この手の映画は(?)特にそう。すなわち、何となく余韻を残すような雰囲気の中で、思わせぶりのセリフが出てくると、それは……？

そう、そんなラストシーンの映画は続編をつくることをその時点で予告しているわけだ……。この映画のラストは、ディーによって大ケガを負わされ、今は車椅子に乗っているロング・ガンが、その車椅子を押すジミーに対して、「組織の中で生きていくなら絶対的な権力を握れるようにしろよ。それができないのなら、今すぐ組織を去れ」と教訓を垂れるシーン。ジミーは最終的に竜頭棍を手に入れ、それをロクに手渡した若手のホープ。すると、『エレクション』パート2では、このジミーが主役……。そう思っていたら、プレスシートには案の定……？

2007(平成19)年1月29日記